

# 環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	12
瑪瑙集	25
紅玉集	27
12月号月評	28
総合誌の窓(26)	30
恵贈句集拝見(27)	32
特別作品「スイスとライン川の旅」	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	37
Ⅱ	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
俳誌交歓	41
他誌転載	42
水のまつり	43
枇の国父の蒼天(21)	44
高台寺・靈山歴史館吟行	46
ひこばえ会通信(6)	48

今月の一句

初鴨を橋ゆく声に近江びと 桂樟蹊子

(昭和六十年作)

晩秋のある日、唐橋のたもとに立つと「あらもう鴨が来ている」と言う橋を行く人の声が聞こえた。湖面には十数羽の鴨が見えたそうである。湖といつも共にある近江の人にも、新しい季節の移り変わりを敏く感じ雷を持つことを改めて嬉しく思われたのであろう。

隆子

# 安乗木偶

塩路隆子

木偶宮へ海女の先立つ月の路地  
秋風や引き幕うすき木偶舞台  
虫の夜を沢市木偶は目を伏せて  
冷まじや蟹の操る武将木偶  
月翳り嘆きの木偶のほつれ髪  
秋鯖の鮓届けられ木偶棧敷  
身に入むや魂抜け木偶の緋ちりめん

# 十二月号光耀抄

塩路 隆子選

淋しいと子には言はない十三夜  
身に入むやをんな流人のほつれ夜具  
言ふなれば雲中の宴霧の宿  
身に入むや「鉛筆いつぽん」反戦歌  
風吹きて一茶郷土の蕎麦の花  
熟れ柿に現実としてアスファルト  
椋鳥の群操るは天の神  
芋茎剥く妣の手捌き思ひつつ  
母許へ燧道一つ赤のまま  
芋を煮る父の遺愛の小鍋かな  
神在はす暁の彩雲身に入むる  
霧上る五合目よりの砂礫坂  
ここからは霧生む谿の奈落かな  
飛鳥路の「万葉おやき」秋日濃し  
ざらつきし肌なつかしや長十郎  
松花堂のをんな塚守る女郎花  
伝説に小女郎哀話草もみぢ

杉本 綾  
円下 宮子  
北尾 章郎  
増田 一代  
宮田 香  
常田 創  
塩路 五郎  
竹内 悦子  
中川 すみ子  
山崎 里美  
前川 ユキ子  
鈴木 照子  
松岡 和子  
坂上 香菜  
石川 かおり  
山口 キミコ  
坂根 宏子

山間の木の教会や小鳥来る  
 紅猿子外湯女をついと見て  
 小豆買ふ深吉野ほとり道の駅  
 庄巻やジャンボカボチャの主役顔  
 をさな子の小さき反抗鳳仙花  
 言ひたきを吞む淋しさや吾亦紅  
 網越しに兎見てゐる運動会  
 絹雲の羽衣纏ふ既望かな  
 橋裏に水かげろふや秋の川  
 コスモスに紛れてしまふ風のあり  
 鍵もせず眠るふるさとスイッチヨン  
 目分量と言ふ味付けや菊脛  
 郷愁の「ゲゲゲの女房」栗の飯  
 コスモスの揺るる古民家アート展  
 風情ある家並さすが柿の里  
 向う家も同じ月見る独りぼち  
 白鳳の伽藍にかかる秋の虹  
 峙てる岳まなかひに蕎麦を打つ  
 かなかなや妣の声聞く野辺の道  
 秋彼岸無口に探す常財布

阪本 哲弘  
 小澤 菜美  
 小林 成子  
 松田 和子  
 三川美代子  
 大松 一枝  
 青山 正英  
 粟倉 昌子  
 笠井 清佑  
 和田森早苗  
 安本 恵子  
 森下 康子  
 新実 貞子  
 松田 洋子  
 松田とよ子  
 宮崎左智子  
 藤見佳楠子  
 井口 淳子  
 田中 浅子  
 岡 佳代子

和紙を漉く由来伝へて秋裕  
 国道の竹屋に販ぐ案山子かな  
 秋深む天鼓一喝画然と  
 秋夕焼路地賑やかにケンケンパ  
 野地蔵に風のおつまる猫じやし  
 ラ・フランス話およびてココ・シャネル  
 白壁に葉擦れ映して破芭蕉  
 新涼やガラス細工の兎愛づ  
 真赤なる色を主張や唐辛子  
 山深き木地師の里に秋の声  
 旬なれど秋刀魚高値に食べられず  
 山を背に茅葺の家葉鶏頭  
 大輪の白菊手向け考偲ぶ  
 丸き眼の案山子に票を投げけり  
 炎天に近づく心地歩道橋  
 新米を炊きて和めり里の味  
 出来秋を祝ふ幟や村外れ  
 旧友の蘊蓄長し菊花展  
 折鶴の百羽が来たり敬老日  
 雲間より満月ひそと暈を被て

能勢 栄子  
 川崎 利子  
 中本 吉信  
 紀川 和子  
 伊藤 憲子  
 伊東 和子  
 笹井 康夫  
 清水 侑久子  
 飯田 美千子  
 池田 加寿子  
 泉 秀行  
 伊藤 純子  
 宇治原 弥幸  
 片岡 久美子  
 桂 敦子  
 山本 節子  
 山本 孝夫  
 山本 丈夫  
 吉田 晴子  
 横田 矩子

航空機幾機紛れむ星月夜  
 白き風丘を揺らしぬ芒原  
 吾子よ吾子一步大きく秋の影  
 花嫁のブーケに止まる赤とんぼ  
 なつメロの軍歌ばかりや敬老日  
 三百キロに亘る秋色奥飛驒路  
 防人を配置の島や秋薊  
 貴船菊見えて生麯の昼御膳  
 火祭の炎は闇を焦がしけり  
 雲の間に生るる名月和楽の音  
 おしろいの露地に忘れし三輪車  
 お土産のどんぐり並べ三歳児  
 役終へて納屋に収まる案山子翁  
 神殿を渡る秋風祈禱受く  
 敬老日思ひを込めし品届く  
 夕霧にその先見えず摩天楼  
 炎天のサイゴンの町行商女  
 セピア色の秋の装ひブーツ履く  
 富士山の高嶺に集ひいわし雲

吉田 希望  
 美濃部くみ子  
 宮越 久子  
 村田 望  
 秦 和子  
 藤本 秀機  
 長濱 順子  
 西垣 順子  
 高谷 栄一  
 竹内喜代子  
 田中 眞  
 土井くみこ  
 富田ヒナ江  
 伊藤 久江  
 三原 利枝  
 中井登喜子  
 西岡 裕子  
 辻 香秀  
 寺田 光香

# 琥珀集

小鳥籠

田下 宮子

海明りうけつつ柵田刈る夫婦

雪平の粥はうましや秋の朝

親友も時に碁敵秋の宵

今秋は豹柄多きファッション誌

身に入むやをんな流人のほつれ夜具

一葉落つ蚕飼なごりの煤け柵

秋の風生家に錆びし小鳥籠（高村智恵子）

十三夜

杉本

綾

黄桃の甘さ分かつや亡き夫と

文字大きい時計贈られ敬老日

キッチンをぴかぴかにしてけさの秋

蕎麦白き風のそよげる伊吹山

雲間より十六夜の月白々と

淋しいと子には云はない十三夜

浪音が消し去る過去や彼岸花

霧の宿

北尾 章郎

大夕焼弥陀の後光と拝しけり

時々は妻の監視下松手入

事業史に二重丸なし蓼の花

常用字に「鬱」の復活そぞろ寒

建て替へて虫の音離る老舗宿

大川を潜る終電秋ともし

言ふなれば雲中の宴霧の宿

秋高し

増田一代

黒葡萄

常田

創

秋高し山頂著き明神岳

新藁を巻き込んでをりロール巻

秋の陽に漣光る梓川

黄葉の進まぬ樹々や温暖化

ゆるやかに糊殻くすべ安曇野路

身に入むや「鉛筆いっぽん」反戦歌

秋雨を得て長咲きの牽牛花

向日葵の後の始末の斬首かな

カーブして幽霊花の多き街

尖るものやはらかきもの草のわた

黒葡萄皿と一点のみ接す

秋冷や吾が身の芯に怒りかな

女難ありと心当たりの銀河かな

熟れ柿に現実としてアスファルト

蕎麦の花

宮田

香

棕鳥

塩路

五郎

風吹きて一茶郷土の蕎麦の花

秋あきつお六櫛買ふ旧街道

コスモスを一輪挿して奈良井宿

殊に濃き蔭を生みけり葡萄棚

案山子らの談合戦術鴉鳴く

けんけんの落書残る秋の暮

羽音千残し群れ発つ稲雀

雨の中燃えつづけをり曼珠沙華

秋深む陶の狸の大徳利

初紅葉色鮮やかや四脚門

秋風を入れて詩囊を満たしけり

霧晴れて山容顕は故山なり

棕鳥の群操るは天の神

聖堂のステンドグラス秋日映ゆ

芋 茎

竹内 悦子

鱗雲

石川かおり

芋茎剥く妣の手捌き思ひつつ

また欠けし信楽湯呑み秋愁ひ

雁渡し今朝の琵琶湖を見に行かな

栗ごはん販ぐビジネス街の昼（大阪三句）

大阪の地下は迷路よ秋暑し

ロレックスの店閑散とうそ寒き

やうやくに送稿成れりちちる虫

小鳥来る

前川ユキ子

富士樹海

鈴木 照子

梯子車にメモリー機能秋の冷

兎らの夢載せて降り来よ鱗雲

神在す暁の彩雲身に入むる

祇園太鼓打つエクスターシュー体育日

今朝秋の瀬音清しやクラシカル

小鳥来るオーブンカフェの喫茶どき

後継ぎのなき現役や種瓢

ざらつきし肌なつかしや長十郎

猿茸天への小さき階に

親指に巻きて手馴れの藁仕事

叱られて無心に踏めり銀杏の実

あの世へとつながる如し鱗雲

晩稲干す阿畔の呼吸農夫婦

ダイビング試みたしや稲の波

霧上る五合目よりの砂礫坂（富士山表口）

噴火口間近や富士に秋澄める

富士を見に空へドライブ秋高し

うそ寒き耳の違和感富士樹海

秋光を集め疾走リレーの子

泣き虫の「おおむし」デビュー運動会

桴上げて鼓隊フィナーレ爽やかに

山行

松岡 和子

霧深しすは天狗かと山をとこ  
秋の岳踏まるる石の決まりけり  
月光を手繰り常念小屋泊り  
雲海の下に浮世の些事を置き  
霧走り前行く夫をさらひけり  
ここからは霧生む路の奈落かな  
昔日の山ガールなりななかまど

松花堂

山口キミコ

松花堂のをんな塚守る女郎花  
飛び石の向かうは寺院萩の花  
艶めきて粒大いなる椿の実  
梅擬水琴窟の音に揺れ  
松花堂の吉兆膳や衣被  
瑠璃越しに届く月光真夜なれば  
目覚めれば月煌々とノクターン

一周忌

坂上 香菜

ゆくりなし雀声真似る朝の鴉  
句を吟味しをれば嗤ふ秋鴉  
呆けもせず楽に生きたし鯛雲  
曇りても露かがやけり一周忌(母)  
萩咲きて看取りし母の項思ふ  
飛鳥路の「万葉おやき」秋日濃し  
しなやかに吹かれて強し萩桜

月明り

阪本 哲弘

山間の木の教会や小鳥来る  
秋風や余白少なき備忘録  
人待つや宵闇刻む花時計  
「月光」を聴きて眠らむ夜の長き  
妻呼びて消ゆるまで見む秋の虹  
眩きは濁世のことよ萩の風  
晩節の急ぐ山路や月明り

鹿の声

山崎 里美

蜘蛛の囀に雨のしづくを幾重にも  
蜘蛛の囀を借りて伸びゆき蔓の草  
真夜に聞く罨にかかりし鹿の声  
芋を煮る父の遺愛の小鍋かな  
親猫の子を呼ぶ声や月の夜  
近付きて纏ひたき香や金木屋  
母弱り「世話になるね」と秋の暮

ロゼワイン

小澤 菜美

背戸の風に急かされ秋の更衣  
ひとり居の静けさに来る小鳥かな  
月に酌む今も昔もロゼワイン  
身に良きと聞きし秋鯖海の蒼  
深吉野の無月や仏深く秘め  
連山に翳落しゆく秋の雲  
紅猿子外湯女をついと見て

小豆買ふ

小林 成子

小豆買ふ深吉野ほとり道の駅  
旅発ちの夫と交して月見酒  
出不精を子に誘はれし良夜かな  
憂きことを忘じ今宵の虫を聞く  
子等去りてしばし戸に立ち望の月  
運動会ビデオ構へて保護者席  
アンカーを馳けし子の背や秋高き

高山祭

松田 和子

天高く飛驒の匠の技光る（高山祭）  
陣笠を目深な衣裳秋暑し  
御簾越しに秋天覗く祭山車  
山深く森林浴や秋の寺  
琴弾きの滝響きけり秋深み  
圧巻やジャンボカボチャの主役顔  
古きよき頃を思へり栗拾ひ

萩の道

三川美代子

思ひ草

坂根 宏子

浮御堂の千体仏や秋澄みて  
をさな子の小さき反抗鳳仙花  
名水に人絶え間なし萩の道  
何処より来しか厨につづれさせ  
名月を背に負ひ戻る家路かな  
秋桜園児のみ込む迷路かな  
翻るTシャツ白し鱗雲

赤のまま

中川すみ子

野 菊

大松 一枝

シネマ果て京の四つ辻夕月夜  
彼岸会や僧高齡の台座椅子  
桃太郎の生れしからくり大津祭  
曼珠沙華潜る人なき四足門  
庭箒を棲処となせりちちろ虫  
母許へ燧道一つ赤のまま  
背景に赤き屋根あり蕎麦の花

山路来て立ち寄る古刹薄紅葉  
俯きて謎ありさうに思ひ草  
瓢棚「明日香美人」種すまし顔  
烈火のごと山有葉の実が開き  
山ガールに山も負けじと粧ひけり  
伝説に小女郎哀話草もみぢ（小女郎池）  
頂上に子らの歓声花野かな  
秋暁やバイクの音の夢うつつ  
秋うららまこと閑けき留守居かな  
小説に倦みて秋の夜「龍馬伝」  
言ひたきを吞む淋しさや吾亦紅  
そぞろ寒メッシュの靴を磨き終へ  
風澄めり車窓にとほき芒原  
迷ひつつ一輪手折る野菊かな

# 瑠璃集

兎

網越しに兎見てゐる運動会  
パレットに多彩な絵具豊の秋  
秋燈下時刻表繰る机上旅  
人影の見えし垣根や秋日和  
束の間の秋夕焼を惜しみけり

既望

こだはりて気まづきままの無月かな  
十六夜や胸ををさめて書に耽ける  
絹雲の羽衣纏ふ既望かな  
爽涼や気のむくままに一万歩  
爽涼に体内時計正しけり

青山 正英

粟倉 昌子

秋の雲

橋裏に水かげろふや秋の川  
鷗尾越えて散華散りゆく秋の空（東大寺光明忌四句）  
大寺の雅楽の舞や秋の雲  
園庭に笙の音満ちて秋深む  
秋天に散華舞ひける光明忌

笠井 清佑

秋遅々と

天帝の高笑ひせり秋遅々と  
コスモスに紛れてしまふ風のあり  
李白てふ銘の酒なり酔芙蓉  
東塔の水煙けぶる秋の暮（薬師寺東塔）  
年経ては朽ちるがならひこぼれ萩

和田森早苗

スイッチョン

小石積む河原に残るキャンプ跡  
秋の陽の軌道変はりし物干場  
鍵もせず眠るふるさとスイッチョン  
信濃より来し花嫁や紅葉月  
教室に祖父母参観敬老日

安本 恵子

## 十二月号月評

塩路 隆子

秋が深まって来ると何だか人恋しい思いが深くなる。日本各地で熊の被害がひろがっている。詩的な見かたをすれば冬眠前に人恋しくなつたとしても言えよう。「泣いた赤鬼」の童話があるが、現に被害を受けた人達がいるのだからそうも言えない。今月は人恋しさを扱つた句が真つ先に飛び込んだ。

淋しいと子には言はない十三夜 杉本 綾

作者は二年前にご主人を亡くされた。山科の里に独り暮らしをされている。何もかもご主人まかせでお暮らした仲のよい俳句仲間のご夫婦だった。今もご主人の丹精されていた畑の一部を耕し収穫を楽しんでおられる。夜には鹿の声や狸が訪問するようである。淋しいにちがいないが離れ住む息子や娘に心配をさせないように「子に言えない」でなく「子には言はない」のはつきりとした意志を表しておられる。立派な生き様を垣間見た思いがする。一カ月遅れの満月、「十三夜」の季語も充分な働きをしている。

身に入むやをんな流人のほつれ夜具 田下 宮子

徳川家継の生母に使えた大年寄絵島の資料館を訪れたときの作品である。大奥ご法度の芝居役者の生島との交際を咎められ、信州高遠に流刑された絵島を偲んでの句である。なんとと言っても「ほつれ夜具」の措辞がすばらしい。華やかな大奥の生活とはかけ離れた粗末な夜具であつたに違いない。それを見て涙もろい作者は涙されたことであろう。哀愁が漂い絵島の悲しみが伝わる作品である。

言ふなれば雲中の宴霧の宿 北尾 章郎

ロンドンの霧を「えんどう豆のスープ」に例えた文章を読んだ記憶があるが、それほどにロンドンの霧は深いようである。掲句は霧深い奥山の宿に泊まれたときの作品であり、中七「雲中の宴」の措辞が素晴らしい。霧に閉ざされた山中、周りの樹々も何も見えず視界を奪われた作者は、まるで雲中にいる如き錯覚を覚えられた。それを眺めながらの夜の餐はまるで宴の心地、下界では味わえないまるで仙人心地の作者であつたに違いない。上五の「言ふなれば」が難なく読者をその世界に誘導する措辞としてふさわしい。かもし出す孤独と幽玄の世界に惹かれた作品であり大切にして頂きたい一句である。

(以下略)